Ⅲ－２　地域の中の湯舟坂２号墳
―湯舟坂２号墳の発掘調査がもたらしたもの―

新谷 勝行・奥 勇介

１．はじめに

京都府立大学地域貢献型特別研究（府大 ACTR）等による湯舟坂２号墳とその出土品の地域資源化を行う事業が 2020 年度（令和 2）にスタートし、その翌年には、湯舟坂２号墳の発掘調査から 40 年の節目を迎えた。1983 年（昭和 58）に発刊された発掘調査報告書の「調査日誌抄」からは、40 年前の調査時の様子がうかがえる。そこには、10 月 27 日に記者発表が行われた後、報道機関の取材対応や行政関係者の対応が続き、10 月 31 日に行われた現地説明会に２～ 3,000 人という大勢の参加者がつめかけたこと（写真１～３）、11 月２日に久美浜町内の小・中・高校生を対象とした青少年教室が開かれたこと等、当時の熱狂ぶりが記される（奥村編 1983）。

写真１　遺物展示の様子（須田公民館）

写真２　現地に向かう参加者

写真３　現地説明会風景

当時、発掘調査を担当した奥村清一郎は、2021 年７月 24 日に開催した「地域資源としての湯舟坂２号墳」の基調講演「湯舟坂２号墳の発掘調査をふりかえる」の中で、報道機関の取材ではヘリコプターが飛び、現地説明会当日は多くの参加者があったこと等、当時の状況を調査担当者の目線でふりかえっている（奥村 2021）。この後、丹後地域では数多くの発掘調査が行われているが、２～ 3,000 人の参加者を迎えた現地説明会はみられないことから、湯舟坂２号墳の発掘調査と現地説明会の開催は、地域にとって、突然に訪れた空前絶後のフィーバーであったと考えられる。ここでいう地域とは、古墳が所在する須田区（＝江戸

時代の須田村)、須田区の小学生が通学する旧川上小学校区（＝明治時代の旧川上村)、また昭和の合併で誕生した旧久美浜町（＝熊野郡)、さらには丹後全域、といったさまざまな領域が想定されるが、調査当時、地域にとって大きなインパクトを与えた出来事であったことは想像に難くない。

本稿では、1981 年の湯舟坂２号墳発掘調査前後の地域の郷土史研究や地域振興の取り組みを振り返ることにより、発掘調査が地域にもたらした影響を残された資料から見るとともに、そこから見える課題と今後の展望について考えるものとしたい。なお本稿の内容は、発掘調査 40 周年を記念して京丹後市立丹後古代の里資料館で開催した「地域の中の湯舟坂２号墳～発掘 40 周年記念展～」(2021 年 4 月 24 日～ 8 月 1 日）にて一部を紹介している。

２.「丹後王国論序説」と湯舟坂２号墳の発掘調査

丹後地域の古代史を語る上で必ずとりあげられる重要な研究として、1983 年（昭和 58）に門脇禎二（京都府立大学教授）が提示した「丹後王国論」がある（図 1 、門脇 1983・1986)。「丹後王国論」発表当時、日本海側最大の網野銚子山古墳（京丹後市網野町）など丹後三大前方後円墳の存在は知られていたが、それ以前の弥生時代の墳墓はカジヤ遺跡（京丹後市峰山町)、大山墳墓群（京丹後市丹後町）等の調査があったに過ぎず、ガラス玉が大量に出土した三坂神社墳墓群や左坂墳墓群（いずれも京丹後市大宮町)、ガラス釧を出土した大風呂南墳墓（与謝野町）や国内最大級の弥生時代墳丘墓の赤坂今井墳墓（京丹後市峰山町）はまだ知られていなかった。

門脇が提唱した「丹後王国論」の前提条件には地域国家論がある。門脇は地域国家の条件として、

①地域独自の王権とその支配体制、

②一定の政治領域、

③独自の支配イデオロギー

の３要素が必要とする。門脇が地域国家としての「丹後王国」の根拠としたものは、

①丹波道主命をめぐる男系のタテ系図の存在、

②丹波（京丹後市峰山町丹波）を核とした竹野川流域を中心とする政治領域の存在、

③方形台状墓を創出した葬制とトヨウケモチ神信仰

の存在であった。

図１　門脇禎二「丹後王国論序説」所収本

なお、門脇は、タテ系図の復元の中で、湯舟坂２号墳が所在する川上谷川流域に河上摩須郎女をめぐる２代のタテ系図の存在を推定した。門脇による「丹後王国論」の発表は、1981 年の湯舟坂２号墳の発掘調査直後というタイミングであったこともあり、門脇が携わった『丹後半島学術調査報告』や『日本海域の古代史』の表紙には湯舟坂２号墳から

出土した金銅装双龍環頭大刀の柄頭の写真が使用された（門脇 1983・1986）。門脇による「丹後王国論」の発表に際しては、河上摩須郎女を輩出した川上谷川流域に位置する湯舟坂２号墳の発掘調査が大きなインパクトを与えたものと推定される。

３．湯舟坂２号墳発掘調査前夜

先述したように門脇による「丹後王国論」では、湯舟坂２号墳が所在する川上谷川流域に、『古事記』開化天皇条にみえる河上摩須郎女をめぐる２代のタテ系図の存在が復元された。一方、このような太古の記憶は、地域の中でどのように伝わったのであろうか。

湯舟坂２号墳の所在する京丹後市久美浜町の須田区には、河上摩須郎女の父、川上麻須の屋敷跡と伝える場所があり、現在も地元の方が建てた木製標柱が立つ。本屋敷跡の史料上の初出は、天明年間（1781-1789）編、文化７年（1810）改正の『丹後旧事記』である。同書には「一、川上麻須郎　当国熊野郡川上の庄須郎の庄に館を造る開化天皇より崇神、垂仁の朝に至る。古事記に曰く旦波道主命娶川上麻須郎の女生御子比婆須姫淳葉田入瓊媛真砥野媛薊瓊入媛朝廷別王以上五柱　川上麻須郎は将軍道主の命と共に当国に有て熊野郡川上の庄に伊豆志禰の神社、丸田の神社、矢田の神社、三島田の神社を祭る。」と記す（永浜宇平ほか編 1927）。また、1923 年（大正 12）の『京都府熊野郡誌』では、河上麻須の屋敷跡として、須田小字シモ山の地を比定する。別に小字トウ屋敷オノミヤ等という場所もあり、後人の研究に委ねている。同書衆良神社の項では、「河上麻須は丹波道主王の外舅にして、上代地方の豪族たりしなり。」とし、「川上麻須郎」は「川上麻須」の誤りとする（京都府熊野郡役所編 1923）。

両書に記される川上麻須の屋敷跡についての伝承は、熊野郡（京丹後市久美浜町）に川上麻須が創始したと伝える神社が点在するため、これらとの関係が考えられる。しかし、『丹後旧事記』をさかのぼる史料がないため、伝承の形成過程は今後の検討課題といえる。

なお、『京都府熊野郡誌』には、このほかにも、川上村内の石器時代遺跡や古墳、横穴、寺跡、城跡、石仏、伝承が記載される。同書の編纂については、不明の点があるものの、1913（大正２）より編纂主査による資料収集が行われ、その後、1918 年（大正７）以降に編纂主任の佐治正章により原稿執筆が行われたと推定される（新谷 2022）。資料収集にあたっては、聞き取り等の現地調査が行われたものと推定され、地域の歴史遺産が体系的に記録された最初の地誌と評価できる。その後、1936 年（昭和 11）の『熊野のたび』には、川上麻須の屋敷、平野古墳、大石大三郎住居跡、衆良神社のさなぼり等が記されており、早くから地域の歴史遺産として記載し、紹介されていたことがわかる（京都府熊野郡教育会編 1936）。なお、戦前の段階では、石室が開口していた平野古墳の存在は良く知られていたが、湯舟坂２号墳は認識されていなかったものと推定される。

湯舟坂２号墳と周辺の古墳群が古墳として認識されるようになったのは戦後のことであった。1972 年（昭和 47）の『京都府遺跡地図』第１分冊には、湯舟坂２号墳が「平地　組合わせ式石棺、石材残存　半壊」と記されており、これが湯舟坂２号墳の初出文献となる（京都府教育委員会 1972）。久美浜町教育委員会が木製の標柱を現地に建てたのはこの前後と推定され、奥村が撮影した発掘調査前の風景写真には、この標柱が写っている（写真 4）。

戦後の須田区では、久美浜町郷土研究会に参加した山本娃久美が、会誌『郷土久美浜』に須

写真４　調査前の現地の様子

田区内の文化財、伝承の紹介を行っている。山本は、地元の須田郷土研究会の中心メンバーでもあった。同研究会のメンバーは、湯舟坂２号墳の発掘調査にあたり作業員として参加する等の協力を行った（奥村 2021）。

このように湯舟坂２号墳発掘前夜は、戦前より須田区に所在が推定されていた川上麻須の屋敷跡の伝承、開口していた平野古墳の存在が知られていたこと、戦後の分布調査で所在がわかった湯舟坂２号墳などの古墳に木製標柱を建てていたこと、地元の須田郷土研究会のメンバーにより須田区内の文化財、伝承の紹介が行われていたこと等がわかる。しかし湯舟坂２号墳が発掘調査される以前は、地域に歴史・文化遺産があることを認識し、記録・紹介することがあったものの、地域資源として積極的に活用する段階にはなかったといえる。湯舟坂２号墳の発掘調査は、地域にとって大きなターニングポイントとなった出来事であった。

４．湯舟坂２号墳発掘調査後の久美浜町内外での活用

発掘調査当時の様子は奥村（2021）に譲り、以下、発掘調査後の久美浜町内外での湯舟坂２号墳および金銅装双龍環頭大刀などの出土遺物の活用について見てみたい。

現地説明会直後の 1981 年（昭和 56）、11 月の『町報くみはま』第 262 号を見ると、井尻武町長（当時）は「数々の貴重な出土品、ふるさとの宝を収蔵できる郷土資料館の建設、また石室墳丘の現地保存など、地域のかたがたの理解と協力をえて、大小百を数える現地一帯を古墳公園とし、さらに町内の古墳群との関連をとり、多くの人達に重要な古墳の理解と認識を得るために役立たせたい。」と語っていた。その後、ほ場整備事業計画の変更が行われ、墳丘および石室の現地保存が実現したことから、久美浜町は、横穴式石室を現地で見ることができる公園として整備・公開した。しかし、「数々の貴重な出土品、ふるさとの宝を収蔵できる郷土資料館の建設」や「大小百を数える現地一帯を古墳公園」とする井尻町長の構想は、その後の経過は不明であるが、実現することはなかった。

出土遺物は、1982・1983 年度（昭和 57・58）に久美浜町が文化庁の補助を得て、財団法人元興寺文化財研究所（現在は公益財団法人元興寺文化財研究所）に委託して保存科学処理が行われた。保存科学処理事業の途中、1983 年（昭和 58）６月６日には、出土遺物が一括で重要文化財に指定され、あわせて京都府立丹後郷土資料館、京都府立山城郷土資料館、京都府立総合資料館の巡回特別展「環頭大刀の発見」が開催され、府内各地で公開された（京都府立丹後郷土資料館ほか編 1983）。その後、出土遺物は、久美浜町教育委員会より京都府立丹後郷土資料館へ寄託され、現在に至っている。なお金銅装双龍環頭大刀は、傷みが進行したことから、2002 年度（平成 14）に久美浜町教育委員会が文化庁の補助を得て、財団法人元興寺文化財研究所に委託して再修理を行っている。なお本再修理時には、サビの進行を防ぐため、酸素に触れないように、エアタイトケース中に窒素充填して保管することとなり、現在に至っている（塚本 2021）。

久美浜町が作成した『町勢の概況（昭和 58 年版）』には、町章、町の木・町の花、町歌に並んで環頭大刀の項目があり、環頭大刀が久美浜町のシンボル的存在として位置づけられていたことを示す（図２）。その後の久美浜町は、「丹後の久美の浜」での一遍上人の龍伝説とあわせ、下水道マンホールの蓋に龍を使用したほか、久美浜湾でドラゴンカヌー大会を開催する等、龍をモチーフとした町おこしを行ってきた（写真５）。また久美浜町内（久美浜一区）の和菓子では、かつて「黄金の大刀」や「環頭大刀もなか」が作られるなど、久美浜町の贈答品や土産ものとしても環頭大刀は使われていた。

活用は、そうした町内での動きにとどまらず、町外においても広がりを見せる。遊絲舎（網野町下岡）では、黄金糸で環頭大刀をデザインした袋帯が製作されている（写真６）。これは、2000 年（平成 12）頃に、旧網野町の起業家グループ「ベンチャーアミノ 21 シルクの会」が黄金の繭の研究をしており、それに伴う町おこしの一環で製作された。また、与謝野町上山田にかつてあった小長谷織物株式会社では、丹後ちりめん縫取織「丹後の黄金の太刀」が製作されており、「奉納」「昭和六十一年六月十三日　初品第一本目也」と記された初品が須田公民館で今も保管されている（写真７）。なお、この縫取織は、後述する企画展示の資料収集を行う中で、久美浜町内においてもう 1 点確認したが、こちらには裏書きがなく、須田区に収められた初品の後に作られたものと考えられ、複数作製されていたことが想像できる。

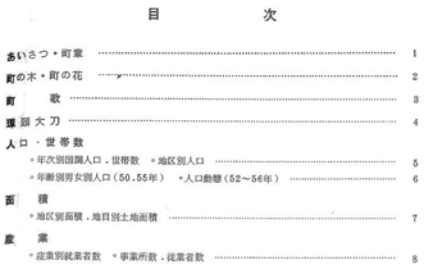
久美浜町内外での動きを見ると、出土遺物は地元から離れてしまったものの、湯舟坂２号墳と環頭大刀は久美浜町のシンボルとして活用されてきたと言え、町外においても印象的なものであったことがうかがえる。

５．須田区での活用

発掘調査後の活用は、湯舟坂２号墳の地元須田区でも行われていた。須田区の小学生が通った川上小学校（2014 年（平成 26）閉校）では、1988 年（昭和 63）の鉄筋コンクリート校舎新築に際して、児童昇降口天井に環頭大刀をデザインしたステンドグラスが飾られた（写真８）。小学校区のシンボルとして採用されたことは想像に難くない。小学校では、ほかに 2004 年度（平成 16）川上小学校卒業記念製作とある「川上がっしゃあええとこマップ」（写真９）を作成している。このマップは、湯舟坂２号墳など小学校区のさまざまな地域資源を「自然と歴史の豊かな川上」として紹介した看板である。

また須田区では、発掘調査の翌年から、毎年 10 月に現地で慰霊祭を行っている。慰霊祭の日は、「古墳祭」と書かれた赤いのぼり旗を立て（写真 10・11）、当日は区長・副区長など区の役員や区内からの参詣者を迎え、区内にある大雲寺と金剛寺の住職が隔年で法要を行う。「古墳祭」ののぼり旗は、2004 年（平成 16）の京丹後市合併まで須田区が行っていた「古墳祭」というイベントで使用していたものである。「古墳祭」は、京丹後市発足とともになくなってしまったが、グラウンドゴルフやビンゴゲームを行う区民の「交流会」に形を変え、現在も慰霊祭の日の午後に開催されており、地区の実情に合わせて現在まで持続している点が特筆される。このほか、須田区内でかつて発行された親睦会（青年会）会報のタイトルには「湯舟坂」が使われ、環頭大刀の絵を背中にプリントしたＴシャツを作成していた。

その後、2005 年（平成 17）には、高龍中学校（2013 年（平成 25）閉校）生徒により、須



目　　次

あいさつ・町章 …… 1
町の木・町の花 …… 2
町　　歌 …… 3
環境大刀 …… 4
人口・世帯数
・年次別国調人口，世帯数　・地区別人口 …… 5
・年齢別男女別人口（50，55年）　・人口動態（52～56年） …… 6
面　　積
・地区別面積，地目別土地面積 …… 7
産　　業
・産業別就業者数　・事業所数，従業者数 …… 8

図２　『町勢の概況（昭和 58 年版）』目次（個人所蔵）

写真６　袋帯「丹後王国の雅」（遊絲舎所蔵）

写真５　龍を使った下水道マンホール（京丹後市 HP より）

写真８　丹後ちりめん縫取織（須田区所蔵）

写真８　旧川上小学校ステンドグラス

写真９　がっしゃあえええとこマップ（2004 年度川上小学校卒業記念製作）

写真 10　慰霊祭

写真 11　「古墳祭」のぼり旗
（須田区所蔵）

写真 12　平野古墳説明看板
（2005 年度高龍中学校総合学習作品）

写真 14　湯舟坂古代の丘公園

写真 13　須田平野古墳へ至る整備された遊歩道

写真 15　須田伯耆谷古代の丘探索絵地図

写真 16　展示風景（栗山雅夫撮影）

田平野古墳に手作りの案内看板（写真 12）が設置され、2006 年（平成 18）頃からは、地区にある須田平野古墳、ユリガ鼻古墳群を結ぶ古墳散策遊歩道の整備などを実施（写真 13）。「須田ふるさと委員会」を組織し、2008・2009 年度（平成 20・21）に「京都府地域力再生プロジェクト支援事業交付金」を受け、区民総出で「湯舟坂古代の丘公園」を整備し、復元建物（竪穴住居・高床倉庫）を建てている（写真 14）。さらに、これまでの歴史資源の掘り起こしの

成果を活かし、「須田伯耆谷古代の丘探索絵地図」を作成している（写真 15）。

公園オープン後の数年は、公園で交流会を開催していたが、敷地の制約や駐車場の確保などの問題があり、須田区公民館へ会場を戻し、現在に至っている。あわせて、須田ふるさと委員会により、地域資源を歩いてまわる等の取り組みが行われていたという。須田ふるさと委員会は、現在、古代の丘公園の管理を中心とした活動を担っている。

６．企画展示「地域の中の湯舟坂２号墳」

丹後古代の里資料館では、1981 年（昭和 56）の湯舟坂２号墳の発掘調査から 40 周年を記念し、2021 年度（令和３年度）春季企画展示『地域の中の湯舟坂２号墳～発掘 40 周年記念展～』を開催した（写真 16）。

開催当時は、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、全国的に緊急事態宣言が発令される状況が度々生じていた。本展示は、当初は 2021 年（令和３）４月 24 日～６月 13 日の会期としていたが、緊急事態宣言の発令により開催してわずか１日で休館に追い込まれ、４月 25 日～５月 31 日を休館とした。その後展示は再開できたものの、会期終了まで 10 日間ほどしかなかったことから、会期を８月１日まで延長した経緯がある。展示解説は５月 22 日に予定していたが、上記休館により中止とした。

なお、同時期に連携同時開催として、湯舟坂２号墳出土品の寄託先である京都府立丹後郷土資料館では「黄金の大刀発掘 40 年　湯舟坂２号墳細見」と題して、出土品を一堂に展示する企画展示を開催していたが、同じく緊急事態宣言の影響を受けている（森島 2022）。

衝撃的な発掘調査から 40 年の間に、上述のように様々な地域レベルで湯舟坂２号墳に関連する活用の取り組みが行われており、丹後古代の里資料館の企画展示は、地域と湯舟坂２号墳のこれまでの歩みを振り返ることをテーマに開催した。展示は、第Ⅰ章：「丹後王国論序説」の世界、第Ⅱ章：湯舟坂２号墳の発掘調査、第Ⅲ章：地域の中の湯舟坂２号墳で構成し、地域における活用のあり方を感じ取ってもらえるものとした。

企画展示の開催に際しては、半年ほど前から市のホームページやお知らせ版への掲載、チラシ配布等により湯舟坂２号墳の活用に関連する資料がないか、情報提供を呼びかけた。この一環で、2020 年（令和２）12 月６日（日）・13 日（日）には、須田区長のご好意により、須田公民館を開放し、区民の方々に資料を持ち寄っていただいての聞き取りを行うことができた。

情報提供を呼びかけ始めた頃はどれほどの活用事例があるのか未知数であったが、多くの方の協力によって資料が集まり、上述のような久美浜町内外や須田区における活用の全体像が浮かび上がったことは、40 周年を機にこの企画展示をした大きな意義となったと言える。

７．おわりに

『丹後旧事記』や『京都府熊野郡誌』等で川上麻須の伝承や須田平野古墳等の歴史・文化遺産が認識された時代と、その後の門脇禎二による「丹後王国論」の提唱や地域における積極的な活用の時代を整理すると、その移り変わりは湯舟坂２号墳の発掘調査が大きな画期であったことがよくわかる。

湯舟坂２号墳をめぐる発掘調査後 40 年間の様々な取り組みは、行政、学校、産業界、民間

それぞれが守り伝えてきた多角的な事例と言え、須田区の活動からは、地域に残る歴史・文化遺産への意識が高く、資料の掘り起こしが十分に行われているように思える。それとともに、湯舟坂古代の丘公園の整備や、古墳祭から交流会への変化と現在に至るまでの活動は、地域振興における「持続可能性」について考えさせられるものがある。

丹後古代の里資料館における企画展示を経て、活用の取り組みの全体像が明らかになったが、今後、さらに観光資源や地域の宝として活用をはかるためには、歴史・文化遺産をわかりやすく語るストーリーの展開や、ストーリーを語る語り部の養成、活用に向けた体制整備が課題といえる。

須田区では、2020 年度（令和２）から府大 ACTR 等を使った京都府立大学との連携に取り組んでいる。また、2022 年度（令和４）には京都府「次世代と地域文化をつなぐミュージアムプロジェクト」（通称つなプロ）に、川上地区を校区に持つ京丹後市立高龍小学校が取り組み、小学生が丹後古代の里資料館（市教委）や府大学生とともに地域の文化遺産等の魅力を学び発信する事業を展開した。このつなプロは終了したものの、2023 年度（令和５）も市教委・府大・高龍小・須田区がつながって高龍小連携プログラムを引き続き行った。湯舟坂２号墳をはじめとする須田区の文化遺産を取り巻く現状は、市教委・府大・高龍小・須田区の４者が核となった活用体制が整い始めており、小学生の発信する力にも重点を置くことで将来的な人材の育成にも広がりを見せてきており、今後こうした取り組みを更に拡充していくことで、上記諸課題の解決にも必然的につながるものと考えられる。

参考文献

奥村清一郎 2021「湯舟坂２号墳の発掘調査をふりかえる」『地域資源としての湯舟坂２号墳 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室

奥村清一郎（編）1983『湯舟坂２号墳』久美浜町教育委員会

奥勇介 2022「地域の中の湯舟坂２号墳展開催報告」『地域資源としての湯舟坂２号墳Ⅱ―出土品研究の最前線―発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室

門脇禎二 1983「丹後王国論序説」『丹後半島学術調査報告』京都府立大学

門脇禎二 1986『日本海域の古代史』東京大学出版会

京都府教育委員会（編）1972『京都府遺跡地図』第１分冊

京都府熊野郡教育会（編）1926『熊野のたび』

京都府熊野郡役所（編）1923『京都府熊野郡誌』

京都府立丹後郷土資料館・京都府立山城郷土資料館・京都府立総合資料館（編）1983『環頭大刀の発見：丹後・湯舟坂２号墳』京都府立丹後郷土資料館

新谷勝行 2021「湯舟坂２号墳の発掘調査がもたらしたもの」『地域資源としての湯舟坂２号墳 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室

新谷勝行 2022「『京都府熊野郡誌』編さんと神谷神社参考館」『京丹後市久美浜町太刀宮文書（久美浜代官所郡中代等文書）・佐治家資料調査と御用留横断研究』（京都府立大学文化遺産叢書第 26 集）京都府立大学文学部歴史学科

塚本敏夫 2021「開ける、調べる、閉める―黄金の大刀を遺し・伝える保存科学―」『地域資源としての湯舟

坂２号墳 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室
永浜宇平・橋本信治郎・小室万吉（編）1927『丹後史料叢書』第一輯　丹後史料叢書刊行会
森島康雄 2022「細見、そして再検討―湯舟坂２号墳細見展から―」『地域資源としての湯舟坂２号墳Ⅱ―出土品研究の最前線― 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室

編集後記

2020 年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも 6 年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが 2018 年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3 回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわかないが、1994 年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。（い）

表紙写真

上左　双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）

上中　第 2 回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）

上右　「つなプロ」風景（諫早直人撮影）

下　湯舟坂 2 号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）

裏表紙写真　湯舟坂 2 号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）

京都府立大学文化遺産叢書　第 33 集

地域資源としての湯舟坂 2 号墳

編　集　諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発　行　京都府立大学文学部歴史学科
〒 606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
https://kpu-his.jp/
発 行 日　2025 年 3 月 6 日
印　　刷　北斗プリント
〒 606-8540　京都市左京区下鴨高木町 38-2